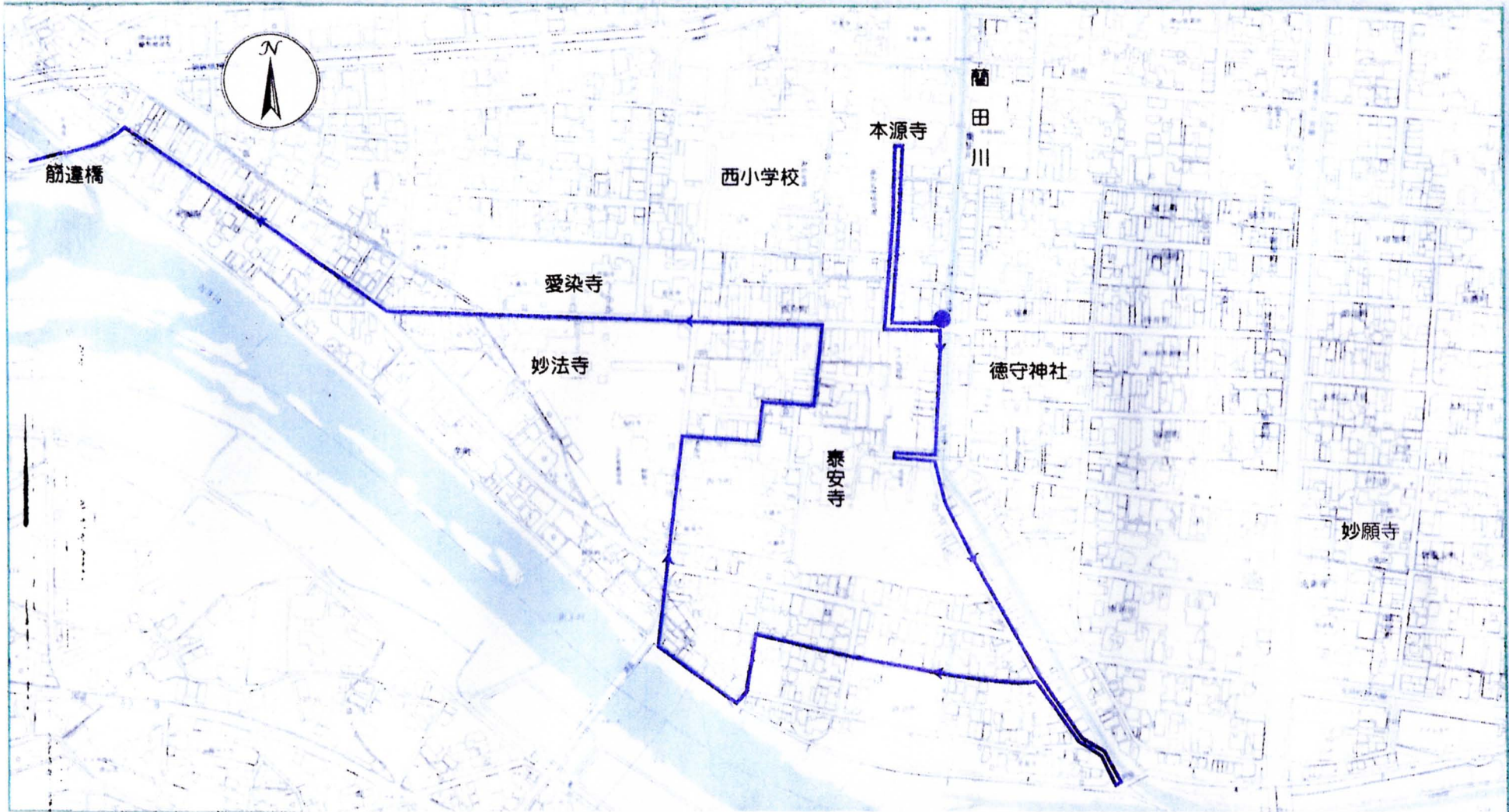


第6回「絵図で津山城下町を歩く会」

～翁橋から西を筋違橋まで歩く～

日時：2017年12月3日（日） 13時～15時30分頃

講師：津山郷土博物館館長 尾島 治 氏



道順
翁橋 → 作形民芸館 → 本源寺 → 雑賣町と団新屋 → 泰安寺 → 成道寺 → 五町橋 → 鉄砲町 → 団今町 → 団昔町 → 妙法寺 → 愛染寺 → 津町 → 栄国町 → 野崎橋 → 二町の松原

主催 津山市観光ボランティアガイドの会
後援 津山市教育委員会 津山市観光協会
協力 吉備人出版

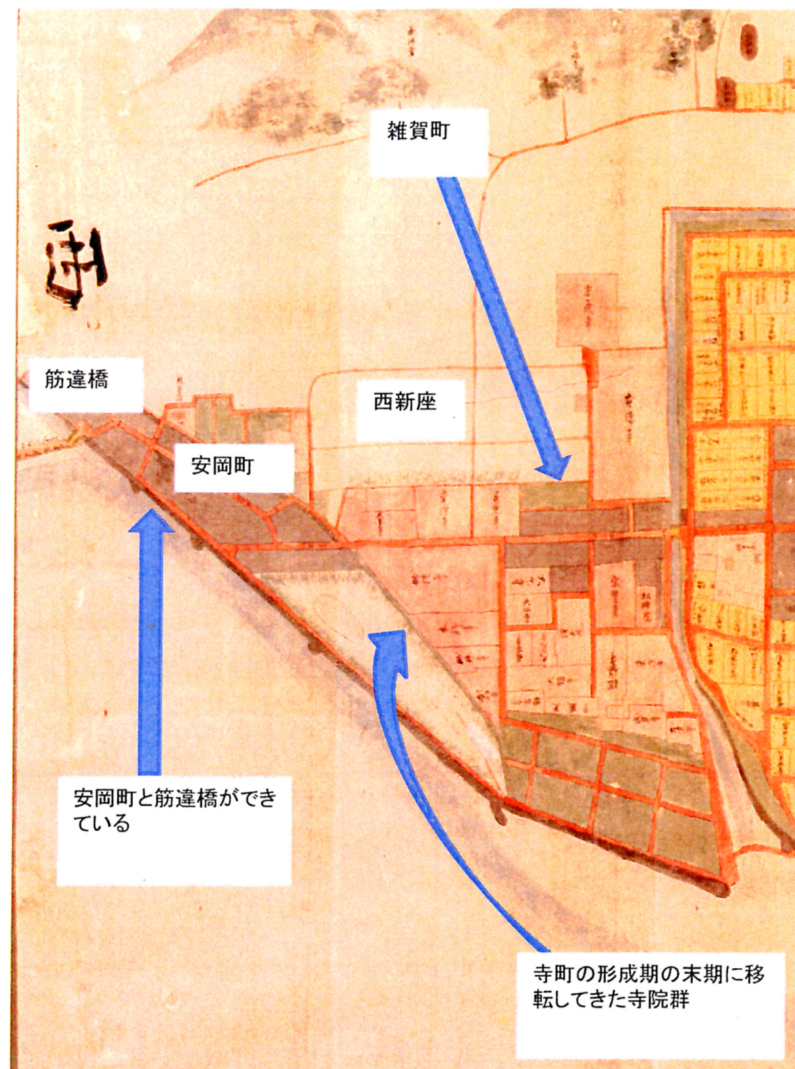


正保津山城絵図、国立公文書館蔵
正保2年(1645)頃

蘭田川と翁橋

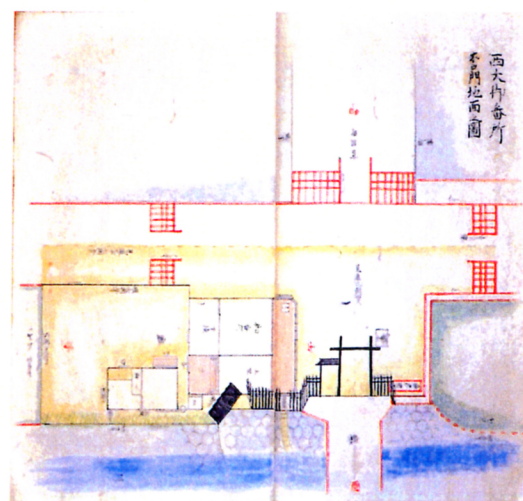
西大番所前の広場の名残を思わせる、やや道幅の広い場所を過ぎて蘭田川に向かうと、蘭田川には翁橋が架かっている。翁橋は、江戸時代には茅橋や久蔵橋(九蔵橋)と呼ばれたこともあったという。大きくはないが、東の宮川大橋に対応する橋である。翁橋東詰には、西大番所が設けられていた。ここから東が、城下町の内町であった。翁橋を渡って西今町へと歩を進めよう。

現在の翁橋は、大正15年(1926)の架橋になる。長さ10m程のコンクリート製の橋である。今では近代化遺産として、国の登録有形文化財に指定されている。橋の規模の割に欄干の親柱が立派で、万成石を用いた見事な造りである。



津山城下町絵図、郷土博物館蔵
享保8年(1723)頃

西大番所木戸門地面之図



本源寺

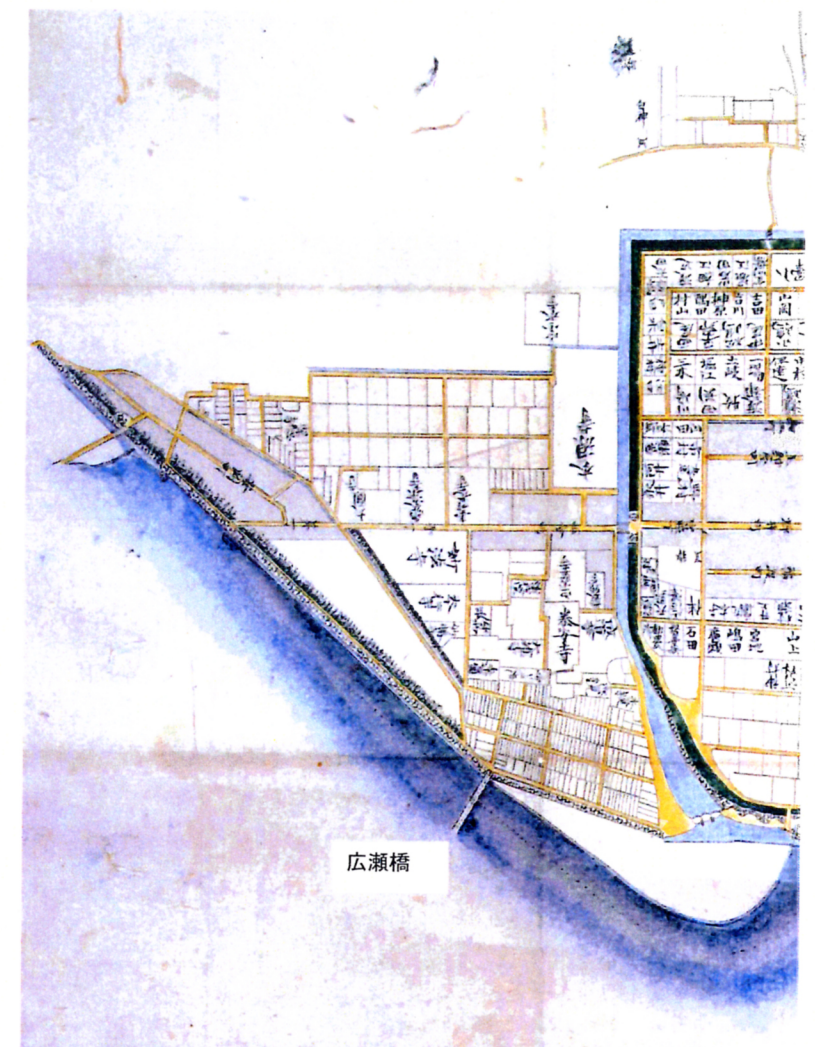
本源寺は、元は神戸村にあった万松山安国寺で、足利尊氏が暦応2年(1339)に創建したものとされている。

慶長9年(1604)、津山森家初代藩主森忠政は、安国寺を小田中の丘陵に移転し、僧海晏を以て開祖とした。しかし、慶長12年(1607)には再度小田中から現在地の西今町北付近に移して、龍雲寺と改めたのである。これは、その年に亡くなった忠政の室智勝院を葬った場所に移したもので、寺領二百石を寄進して菩提所とした。

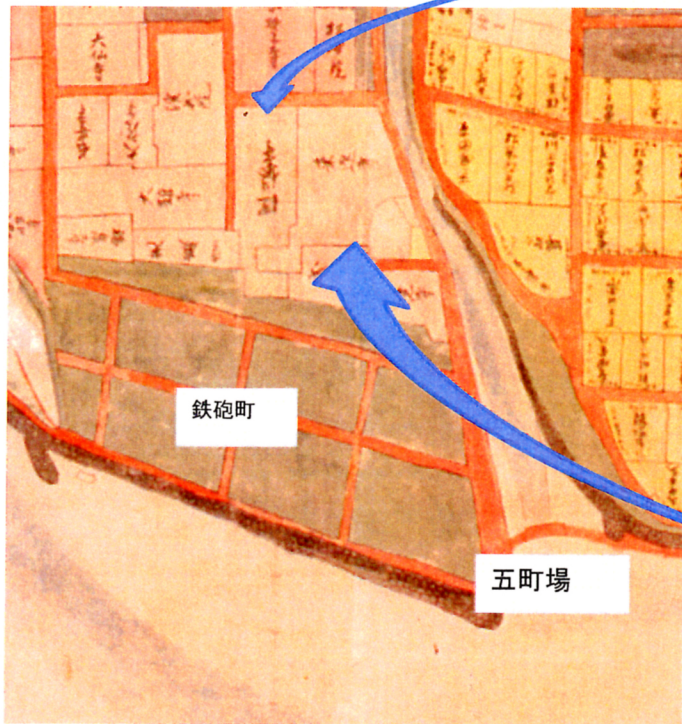
雑賀町と西新座

雑賀町は、森藩の時代に、鉄砲等の扱いを得意とする技能集団であった、雑賀衆をおいた町と言われている。しかし、戦のない江戸時代においてその存在価値は薄れていき、松平藩時代には、特殊な能力を持つ集団としての雑賀衆は、その意味を失い、町も自然と消えていったという。

この雑賀町から西北のあたりは、津山藩の家臣団の増減により、武家町が成立したり、また寂れていったりしていた。この町が新しくできたときには、西新座と呼ばれていたという。



津山城下町絵図、郷土博物館蔵
嘉永7年(1854)



泰安寺

元は涅槃寺と称していたが、元文4年(1739)に泰安寺に改めたという。

泰安寺は松平家の菩提寺なので、その霊屋には、松平家代々の位牌と共に、徳川家康から八代將軍吉宗までの、將軍家の位牌が祀られている。

松平藩の藩主は、津山に在城の間には、しばしば寺院に参詣する。その時には、地藏院・本源寺・泰安寺・妙法寺などは、欠かすことのできない寺院であるが、中でも松平家の菩提寺である泰安寺は特別であった。

成道寺

成道寺は、源譽を開祖とする浄土宗の寺院で、源譽は慶長8年(1603)、森忠政に従って美濃金山から来住した。忠政は、翌慶長9年(1604)には寺院を造営し、源譽を住持として九品山来迎寺と名付けた。

元和2年(1616)4月に家康が他界した後、家康の位牌が各地に送られたが、同年の11月に上笠茂兵衛と坂井助左衛門に守護されて津山に入った位牌は、来迎寺に安置された。

享保4年(1719)5月の雷による火災を初めとして、元文4年(1739)9月、宝暦元年(1751)12月と相次いで火災に遭った。こうした中で、「来迎」と「雷光」、「九品」と「苦本」、「照源」と「焼滅」が音が通じるため縁起が悪いとして、宝暦3年(1753)3月に現在の転法輪山成道寺という山寺号に改めたという。



五町場での砲術訓練の様子
津山景観図屏風

五町場

家臣が砲術修行をするのは、鉄砲町南土手の東よりで、蘭田川と吉井川の合流点付近が決まった場所とされ、五町場と呼ばれていた。五町場というのは、吉井川を越えた南岸に設けられていた着弾点までの距離が、約5町(約540m)あったからと言われている。



広瀬橋
津山景観図屏風

広瀬橋

江戸時代には、吉井川の瀬の名前「広瀬」から広瀬橋と呼ばれ、鉄砲町の土手と吉井川の南岸を結んで架けられていた。当初は、季節によって渡し船と土橋を使い分けていたが、十八世紀の末頃には、常設の橋が架けられていたと思われる。

鉄砲町

鉄砲町は、江戸時代には、鉄砲足軽の組屋敷がおかれた町である。『津山誌』では、森藩時代に鉄砲足軽の屋敷を配したことが、名前の由来とする。そして、万治頃には、城東地区の鉄砲町に対して、「西鉄砲町」と呼ばれていたとする。

具体的な資料では、『正保津山城絵図』では、「足軽町」と記載されている。

また、『津山絵図』では「鉄砲者屋敷」と表記し、元禄以前の様子を描く『津山地図』では、「扶持人屋敷」としながら、土手道には「鉄砲町土手筋」と表記している。

西寺町

城下町の建設期には、武士や町人など、多種多様な宗派の人々が集まり住むことによって城下町ができた。そうした人々の必要性に応じて、津山藩は、城下町の東西の端に各宗派の寺院を集めて寺町を作った。

東の寺町が丘陵上に配置されたのに対して、西寺町では、町人町から続く主要な街道に沿う形で寺町が形成されていった。高い土塀と豪壮な建築物が建ち並ぶ寺町は、城下町の防衛施設と位置づけられることもあった。

妙法寺の鰐口

妙法寺の鰐口は、慶長18年の年号をもち、その銘文に「作州津山富川村」とあり、津山の地名使用の初期の例として貴重な資料となっている。津山市の重要文化財に指定されている。



妙法寺の鰐口 津山市指定 重要文化財

愛染寺

愛染寺は、慶長10年(1605)三月、僧快雲によって創立されたと伝えられる、古義真言宗の寺院である。快雲は、元は備前岡山で金剛寺という寺に住していたが、津山の城下町が建設される過程で来住し、堂宇を建てて高室山愛王院金剛寺と号したという。

その後森藩の庇護を受け、承応年間(1652~1655)には、金剛寺には十五仏堂、千手観音堂、鐘楼などが建ち並んだという。延宝年間(1673~1681)、僧専啓の時に愛染寺という名に改めた。

茅町

江戸時代前期の正保の津山城絵図では、茅町は西寺町から吉井川土手まで続く町並みとして描かれ、後に安岡町ができるまでは、この町が城下の外れであった。その頃は、萱屋町と表記され、城下の東の端にも萱屋町が存在しており、城下町の東西両端に意図的に配置したことが分かる。

その当時、萱屋町を抜けて吉井川土手に当たると、道筋は右に曲がり、土手を西北に進んで、藪の鼻から山裾を二宮方面に進んでいた。すなわち、紫竹川を渡ることはなかった。

二宮の松原

森藩では、慶安元年(1648)にこの道筋を官道と定め、旅人のために四軒の茶店を置いた。そして、その後、延宝8年(1680)には街道整備の一環として松並木が整備されたという。

後の松平藩時代の資料によれば、街道沿いに植えられた松は、近隣の農民の管理とされ、枯れた場合には植え替えなければならない定めであった。

こうした厳しい管理の下に守り伝えられ、津山を代表する松並木として広く知られていた二宮原の松も、軍用船の用材として供出するため、太平洋戦争末期の昭和18年(1943)、ついに伐採されてしまった。



二宮の松原

安岡町

安岡町は、津山城下の西の境となる町で、安岡町という名は、この地域から北に広がる丘陵地の名から付けたとされる。町並みは寛永頃(1624~1643)に成立し、その後、寛文頃(1661~1672)に東隣の茅町と共に城下町に編入されたという。

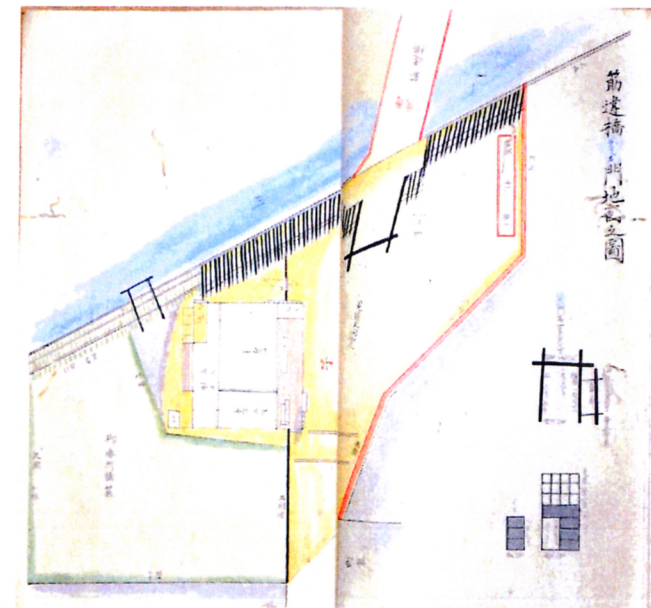
この町筋が形成されることによって、二宮への道筋が、吉井川土手道から安岡町筋へと、変わった。

元禄10年(1697)の記録では、町内に、屋号ではなく「作人」「商人」と表記される家の多いことが特徴である。また、北側西端には、五軒の鍛冶屋が軒を連ねていた。これらも、東の端の東新町に鍛冶屋が多かったことと関連して、計画的な配置が感じられる。

筋違橋

筋違橋は、二宮から山裾を東に流れてきた紫竹川が、緩やかに南に方向を変えて、吉井川に合流する河口に架けられた橋である。

正保2年(1645)の「美作国津山城絵図」では、筋違橋は確認できない。道筋も山裾を通るようになっている。しかし、正保4年(1647)春の記事では、「林田大橋京橋懸り右之古木にて安岡町筋違橋もかかる」とあり、宮川大橋と津山城京橋門の京橋の古木で、筋違橋を架けたということで、具体性がある。これに関しては、寛文4年(1664)夏「右両所の古木二而西ノ筋替橋懸ル」といった、同様の記事も見られ、正保4年頃には架けられていたものと推定できる。



筋違橋

筋違橋木戸門地面之図